

8月5日 年間第18主日

コヘ 1:2, 2:21～23 コロ 3:1～11 ルカ 12:13～21

「あなたがたは(洗礼によって、キリストと共に)死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。」(コロ 3:3)

やがて来たるべき神の国に復活する命 …… 永遠の命のことを考えましょう。

1. ルカ

ルカ福音書はこの愚かな金持ちの警え話で、人々に永遠の命のことを真剣に考えるようにと呼びかけました。

v.15 「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」

この物語りが一般の書物に書かれているのなら、「人の命」とは人間の現在の生命のことであるに違いありません。しかし聖書の中で、しかもルカ福音書のこの前後関係の中で語られるとき、それは確かに私たちキリスト者が洗礼によって新しく生まれた命 …… すなわち永遠の命のことを語っているのです。

この世での現在の生命と、来たるべき世である神の国の命とが、この警え話では意図的に対比されています。

ある金持ちの畑に(驚異的な)豊作が訪れました。彼が日夜そのために労しながら求めてきた収穫が、何年分もいっぺんに彼のものになりました。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。」

(v.19) 彼は“安心”を獲得したのでした。

しかし“キリストの福音”はそれとは別のことを語っていることに、この警え話は私たちの目を向けさせようとしているのです。

2.

「洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられた」(コロ 2:12) 私たちキリスト者 …… 、こうして主日のミサに集まって来ている会衆は、キリストの死と復活によって起こったこと、そして将来私たちに起こるであろうことを知っています。それは神の国が来るということです。キリストの救いは私たちに永遠の命を約束しました。それは、私たちがやがて復活して神の国に生きるようになる将来の命のことです。

この世での現在の富や安心は、永遠の命とは別のものです。キリスト者は将来の神の国に目覚めていなければなりません。

「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」(ルカ 12:15)

「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」(ルカ 12:21)

これが“キリストの福音”なのです。

3. コロ

私たちキリスト者の信仰と愛は、神の国の希望に基づいています(コロ 1:4-5 参照) この希望を説明して、使徒パウロは語っています。

v.4 「あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

だから、地上的なもの(v.5)、この世での現在の富や安心こそが人生の目標であるというような「うそをついてはなりません」(v.9)。「貪欲は偶像礼拝にほかならない」(v.5)のです。

4.

初代教会が生み出した新約聖書は、“キリストの福音”が“(来たるべき)神の国の福音”であることを、私たちに明確に伝えてくれています。

キリストの再臨が未だ将来のことであるために、教会にとってはいつも神の国の希望について語って、会衆を目覚めさせる必要がありました。

再臨のキリストは、「すぐ近くに(来て)おられます。」(フィリ 4:5)

神の国の到来の日は、御子がそこから私たちに救うために御自身をいけにえとしてささげてくださった「神の怒り」(コロ 3:6、1テサ 1:10)の到来の日であることを、代々の教会は聖書から聞き続けて来ました。教会はキリストの復活および昇天と、終末の再臨との中間の時代の中に存在している、という事実は今日も変わっていません。

私たちがそこで生まれ、育ち、歩んで来た 20 世紀のキリスト教は、この点に関して大いに「うそをついて」来たことを、反省する必要があります。

教会は個人の遺産の正当な分配や、民族や国家の富の公平な配分が重要課題であることを否定しているわけではありません。地上の教会は、今はそのような“この世”の中に存在しているのです。しかし私たちの主キリストは、そのような問題の裁判官や調停人ではありません。

「“然り、わたしはすぐに来る” アーメン、主イエスよ、来てください。主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。」(黙 22:20-21) アーメン、ハレルヤ。

8月12日 年間第19主日

知 18:6～9 ヘブ 11:1-2,8-19 ルカ 12:32～48

1. ヘブ

vv.1-2 「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。」

キリスト教会が代々にわたって受け継いで来た“信仰”とは、神の国を待望する(v.16)復活の信仰(v.19)です。いつの時代にも教会は、キリストが過越の小羊として屠られたことによって、私たちが神の国の民として贖われたことを記念するミサをささげて来ました。現代の私たちの教会のミサも全く同様です。主キリストの再臨の日まで、教会は「地上ではよそ者であり、仮住まいの者」(v.13)としての旅を続けて行きます。

2. 知

モーセに導かれて荒れ野の旅へとイスラエルが出発した、あの過越の夜のことを描いているこの賛歌は、「昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました」とヘブライ人への手紙が述べている、正にその信仰の歌です。そしてそれはそのまま、私たちミサをささげる群である教会の信仰の歌でもあると言って良いでしょう。

3. ルカ

ルカ福音書は“目を覚ましている僕の譬え話”を、主の再臨を待っている教会を司牧する使徒たちに当てはめて語りました。そのためにマタイ福音書にはないv.41が挿入されているのです。そのことに注目すると、このテキストは私たちにとって非常に身近なものとなります。

4.

カトリック要理の70ページを見ると、次のように書かれています。

「キリストの定めにより使徒たちは、ペトロをかしらとする一つの団体でありました。それと同じように、使徒の後継者である司教たちは、ペトロの後継者であるローマ教皇をかしらとする一つの司教団を構成しています。」「司教団の権能は、特に公会議において行使されます。」

最も新しい公会議は、1962年から1965年にわたって開かれた第二バチカン公会議であることを御存じでしょう。この公会議の第一会期の総会が、典礼に関する討議から始まったことは、特に重大です。“典礼憲章”はこの公会議最初の公文書として公布され、それによって今日の典礼刷新が始まったのでした。

この典礼刷新の第一は、“典礼の母国語化”ということでした。この公会議に参加し、そこで典礼委員の一人として選ばれた当時の長江恵司教は、自ら次のように発言したと後にその思い出を語っておられま

す。

「日本の典礼は、日本語であるのが本来であるし、それなくては意味がない。ミサはみんなのためにあるのに、ミサの中で一番大切な福音と書簡の朗読さえ日本語でしないのは、全然意味がないのではないか……。」

私たちは今、この公会議の恩恵に与かって、ミサを日本語でささげているのです。

典礼刷新の第二は、それぞれの国や民族の“文化への適応”ということでした。そしてこれらの第一第二の上に第三の、“典礼における信徒の行動的参加”が実現するようにという、明確な方針が確立したのです。ミサが神の民の共同の祭儀であることがこの公会議で確認されたのです。「信徒の意識的、行動的、充実した参加……」は「教会が望み、祭儀自体の性格からも求められている参加であり、それに対してキリスト者は、洗礼の秘跡によって権利と義務を持っている」と、ミサ典礼書の総則の第一章は述べています。

5. ルカ

vv.33-34 「主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。確かに言うておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。」

私たちは今朝この譬え話を、教会の司教と司祭にだけ関わる教えと考えてはなりません。司祭がキリストの代理者としていけにえをささげ、神の民の集いを司会するミサに、信徒が行動的に参加することこそ、ルカ福音書が私たちに呼びかけていることなのです。

v.40 「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

アーメン、ハレルヤ。

8月19日 年間第20主日

エシ 38:4～10 ヘブ 12:1～4 ルカ 12:49～53

1. ヘブ

vv.1-2 「すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜くではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。」

新約聖書は幾つかの個所でキリスト者の人生を、古代ギリシアのオリンピアの競技になぞらえて描いています。信仰の創始者また完成者であるイエス・キリストは、私たちの罪のために十字架の死を耐え忍び、復活して死に勝利されました。

キリスト者の信仰の人生は、罪との戦いの中で忍耐強く走り抜く競走のようなものだと、今朝の聖書は私たちに語りかけています。

2. ルカ

20世紀のキリスト教が意図的に無視し、決して真面目に受け止めようとしなかった主イエスの言葉がここにあります。

v.49 「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」

それが終末の“裁きの火”を指していることは、全く疑いの余地がありません。主イエス・キリストの十字架の死と復活によって、“裁きの火”が投じられました。それはもう終わってしまったのではなく、これから歴史の終末に展開される裁きです。

v.51 「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらしすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。」

主イエス・キリストへの信仰の有無によって、救われる人々と滅ぼされる人々という二種類の人間が区別されるということを覆い隠すことに、20世紀の教会は熱心でありました。

3. エシ

エレミヤは紀元前7世紀末からその活動を始めて、南王国ユダがバビロンの王ネブカドネツアルによって滅ぼされたBC.587年頃までの40年余にわたって語ったヤーウェの預言者でした。エレミヤは成功するためではなくて敗れるために、受け入れられるためではなくて拒絶されるために預言者として召されたと言うことが出来ます。

今朝のテキストには、エレミヤに好意を抱きつつも、異教化した職業預言者たちと国粹主義の役人たちに扇動されて、優柔不断であったゼデキヤ王の姿が物語られています。王も民も、最後までエレミヤの預言に従いませんでした。そして「ついにその民に向かって主の怒りが燃え上がり、もはや手の施しようがなく

なった」と歴代誌下(36:16)はユダの滅亡を記しています。

有名なシスティーナ礼拝堂のミケランジェロによる天井画の中に、この悩めるエレミヤの姿が描かれています。今は亡き日本の旧約学者関根正雄氏は「運命と闘い神と格闘し、神に負けて神に帰る」と、エレミヤを解説されました。神が御自分の民を捨てられ、しかもなお厳然として立ち給う神を、エレミヤは体験したのでした。神の裁きの現実を真に受け入れることによって、彼は神の将来の救いを語る事が出来たのです。(エレ 29:10、代下 36:21-22 参照)

4.

主イエス・キリストの十字架の死は、敗北の死でありました。死とは、神から見捨てられることなのです(マコ 15:34)。

私たちはみな死を逃れることの出来ない存在です。しかも死は自然な生命の終わりではなくて、神の怒りによって(詩 90:3-12)命を取り上げられる(ルカ 12:20)ことなのです。御子はその十字架の上で受けられた死は、正に罪人である私たちへの裁きとしての死でありました。終末の裁きの日は必ず来る。しかしそこで私たちが受けるはずの裁きと死を、御子は私たちに代わって、既に耐え忍んで受けてくださっているのです。

しかし終末の裁きを信じない人々、主イエス・キリストの十字架の福音を信じない人々、すべて罪の赦しの洗礼を受けなかった人々は、神の怒りによって滅ぼされます。

このような裁き主イエス・キリストの来られる「かの日」(ヘブ 10:25)を待ち望みつつ、「自分に定められている競走を忍耐強く走り抜く」(ヘブ 12:1)キリスト者の人生は、分裂と対立を安易に避ける偽りの平和主義とは異質なものであることに、目覚めなければなりません。

「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」(フィリ 3:20-21)

アーメン、ハレルヤ。

8月26日 年間第21主日

イザ 66:18～21 ヘブ 12:5～13 ルカ 13:22～30

第二バチカン公会議から始まった典礼刷新が、何よりも第一に目指して来たことは、キリスト者の全生活の中心であるミサの祭儀に、信者が意識的、行動的、効果的に参加するということでした。

ミサを司式する司祭は、キリストの代理者としていけにえをささげますが、この司祭の奉仕を通して信者一人一人の霊的ないけにえがキリストの奉獻に一つに結ばれるのです。この意味で、感謝の祭儀は神の民全体が一つになって共にささげるものであり、洗礼の秘跡を受けたすべての信者の参加を典礼刷新が目指して来たのは、このためでありました。

このような感謝の祭儀の中で、私たちは今朝も聖書を通して語られるキリストの福音を聞いているのです。ミサとは無関係な聖書研究ではなくて、正にミサの中で、ミサを共にささげる民に向かって語られる神のことばを、今朝の朗読聖書を通して聞こうではありませんか。

1. ルカ

v.24 「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」

私たちが今朝も共にミサをささげる群としてここに集まって来ているということこそが、狭い戸口を通じて入って来たことになるのだと考えると、今朝の福音書の物語り全体が非常に理解しやすくなります。

主イエスが神の国の福音を宣教して歩まれたとき、どこでも多くの群衆が集まって来ました。ご一緒に食べたり飲んだりした人々、広場でその教えを聞いた人々の多くが、ピラトに向かってイエスを「十字架につける」と叫んだのと同じ人々であったことを思い起こしましょう。イエスに従った人々は、全体から見ると少数派でありました。彼らは狭い戸口から入った人々でありました。

主イエスの再臨の日に、目を覚ましているキリスト者の群とは、どんな人々の群なのでしょう。v.25の「家の主人」も「御主人様」も、再臨のキリストのことを指しています。そして神の国の宴会の席に着く人々と、閉ざされた戸の外に残る人々によって描かれているのは、終末の裁きの場面以外の何ものでもありません。

ルカ福音書を始めとする新約聖書の各書を生み出した初代教会で、それらは共にミサをささげるために集まった会衆に向かって物語られたり朗読されていました。それらはミサの中で、ミサをささげる人々のために、彼らを励まし育て訓練するキリストの福音として朗読されました。そのような会衆、そのような群こそが、狭い戸口から入った人々なのだ、このルカ福音書の朗読を通して主イエス・キリストは語ってくださったのです。

2. ヘブ

ミサの祭儀に信者が意識的、行動的、効果的に参加するという現代の典礼刷新が目指している課題を、

「主の鍛練」(v.5)として受け止めることが、21世紀の私たちの教会を造り上げて行く上でとても重要なことなのではないでしょうか。私たちが集まって共にミサをささげることが、神によって「子として取り扱って」(v.7)いただいていることなのだと知りましょう。

典礼刷新の課題は、決して司祭や特別な奉仕者たちだけのものではなくて、すべての信者が共にその一端を担うことによって、21世紀の教会を造り上げて行く課題なのです。

3. イザ

イザ 56-66章は第三イザヤと呼ばれるもので、紀元前6世紀のエルサレム神殿再建に続く時代の預言集です。そして今朝の朗読箇所はこの第三イザヤの結尾であるばかりではなくて、イザヤ書全体の総括としての重みを持っているのです。それは、“救われた神の民”は国々を越えて“兄弟を救う神の民”となると、神の救済史の遠大な展望を語っています。第三イザヤが描いた典礼刷新の幻は、「彼らはわたしの栄光を国々に伝える。彼らはあなたたちのすべての兄弟を主への献げ物として」(vv.19-20) 神のもとへ導いて行く、というものでした。

私たちの感謝の祭儀は、信者の霊的いけにえがキリストのいけにえと一つに結ばれる奉獻の祭儀です。ただ私たちだけではなくて、私たちの「兄弟を主への献げ物として」導いて行くことを、神は求めておられます。

現代の典礼刷新は20世紀と共に過ぎ去ってしまったものではなくて、むしろ21世紀の教会を造り上げて行くこれからの課題なのです。 アーメン、ハレルヤ。